巻頭言

"A rolling stone gathers no moss."

SAITO Takehiko
人獣感染症研究チーム　チーム長　西藤　岳彦

略歴を聞かれるのが非常に苦痛で、実際大学卒業後の経歴を説明するとなるといささか骨の折れる作業になります。昭和53年から始まった修士積み上げ６年制の真っただ中の入学のため、「大学卒業は昭和60年ですが、積み上げ修士で修了は昭和62年です」から始まります。修了後せっかく採用していただいた製薬会社にいたのは４年４カ月、その後アメリカで２年８カ月ポスドクとして研究生活を送りました。これにも注釈が必要で、当時博士号は持っていなかったのですが、獣医だから医者と同じでポスドク扱いでいいだろうという当時のボスの取り計らいで、ポスドクとして給料をもらいながらの研究生活でした。月に二回、小切手で給料が支払われるアメリカンライフです。アメリカでのポスドク生活後は、神戸大学農学部で助手として、３年間お世話になりました。その間にも、阪神大震災の洗礼を受けるというエピソードに事欠きません。

次に、国立感染症研究所に移るのですが、ここも最初は神経系ウイルス室で採用され、日本脳炎や狂犬病ワクチンの検定や当時、精神疾患との関連の疑われたボルナ病ウイルスの研究などを少しかじり、一年後に呼吸器系ウイルス室(のちのインフルエンザウイルス室)に異動になりました。感染研でも、最初は戸山庁舎でしたが、３年後に武蔵村山庁舎に移りましたとの説明が入ります。そして、感染研での８年の生活の後に動衛研にお世話になり、早６年が過ぎようとしています。実に学校を出て以来四半世紀に満たないうちに、５つの職場を転々としたことになります。

タイトルにあげたことわざは、日本や英国と米国の間では解釈が異なっているという話は以前から言われています。日本では、苔「すら」付かない、ことから能力が身に付かないと捉えるのに対して、米国では、苔がつかない＝能力が錆びつかない、と捉えるとのこと。いまや斜陽の大英帝国と日本で同じ解釈なのは、何かの暗示かもしれません。能力が付いたか、付かなかったかは、第三者の評価にお任せするにして、動き回った結果得たものは、決して小さなものではありませんでした。一番大きな収穫は、やはり仕事上での人のつながりということになります。アメリカに行って以来、幸いにもインフルエンザの研究を続けているため、研究成果の割には知り合いが多くできました。同じ環境にとどまるのに比べて、より幅広い人たちと知り合う機会に恵まれたと思っています。また、色々な研究室で研究をしたので、全く同じプロトコールでもうまく行くラボと、多少の修正が必要なラボがあるということを身をもって体験しました。室温インキュベートの室温は、アメリカでは年中大差ありませんが、日本では夏と冬で大違い、ましてタイではそもそも温度が違っていて、これが実験に大きな影響を及ぼすことがあります。

近頃、若手研究者の留学離れが取りざたされています。確かに以前に比べ研究室の設備レベルは欧米に肩を並べるほどになっています。ただ、数カ月に何人かのポスドクやスタッフ研究者が出たり入ったりのダイナミックな研究環境は、国内ではまだまだ見ることはできません。このような環境で得られるものには、一ヶ所にとどまることでは決して得られないものもあります。日本がますます内向きになっている今こそ、外に出て異なる環境に身を置いてみるのも一興かもしれません。